

【技術分類】 2－1－2 5 種別栽培方法／腐生性菌／サンゴハリタケ科サンゴハリタケ属

【技術名称】 2－1－2 5－1 サンゴハリタケ (*Hericium ramosum*)

【技術内容】

1 生理特性

菌糸の成長温度は 20～25℃で比較したところ、25℃でもっともよく成長する。子実体は発生温度が 18℃よりも 16℃の方がサンゴ状の枝が上方にしっかりと生長する（図 1）¹⁾。

2 原木栽培

栽培試験等の事例はないが、菌床栽培における栽培特性からヤマブシタケと同様にコナラ等の広葉樹を利用した短木殺菌栽培が可能であることが推察される。

3 菌床栽培

オガコは広葉樹だけでなく、十分な加水堆積を施した針葉樹（スギ）も使用できる¹⁾。また、コーンコブミールの利用も可能である^{1) 2) 3)}。培地添加物は生コメヌカ及びコーンブランに比べてフスマでは収量が少なかった¹⁾。オガコとコーンブランの混合比率は 10：4（容積比）が良好であった¹⁾。

培養中の温度は 22℃前後で、日数は 20～25 日程度が適当である¹⁾。発生温度は 16～18℃前後であるが、子実体は 16℃前後で生育させた方が美しい形になる¹⁾。発生操作における「菌かき」は、実施した方が良質な子実体を形成する¹⁾。栽培容器はビン及び袋で可能であるが、850ml、口径 62mm の容器における詰め重量は 600～650g が適当である¹⁾。850ml ビン 1 本からは 100g 以上の収量が期待できる（図 2）^{2) 3)}。

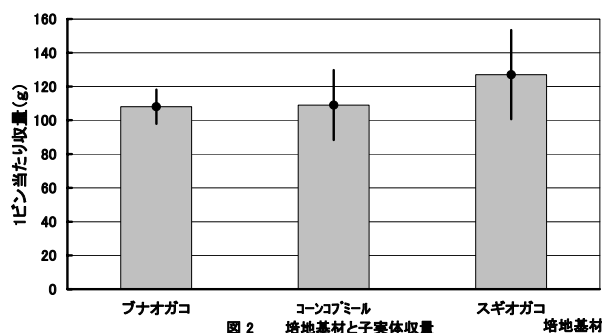
【図】

図 1 発生温度別のサンゴハリタケ子実体形成の比較



出典：本技術集のために撮影者より提供を受けて掲載（撮影者 川島祐介）

図 2 培地基材別の子実体収量



出典：「サンゴハリタケの栽培特性」、第 54 回日本林学会関東支部大会論文集、2003 年 3 月、川島祐介、中嶋薫著、日本林学会関東支部発行、260 頁

【出典／参考資料】

- 1) 「サンゴハリタケの栽培特性」、第 54 回日本林学会関東支部大会論文集、2003 年 3 月、川島祐介、中嶋薫著、日本林学会関東支部発行、259－260 頁
- 2) 「野生きのこ遺伝資源の保存と栽培技術に関する研究－サンゴハリタケ栽培試験」、平成 14 年度群馬県林業試験場業務報告、2002 年、川島祐介著、83 頁
- 3) 「野生きのこ遺伝資源の保存と栽培技術に関する研究」、群馬県林業試験場研究報告 第 10 号、2004 年 3 月、川島祐介、松本哲夫著、群馬県林業試験場発行、66 頁

【技術分類】 2－1－2 5 種別栽培方法／腐生性菌／サンゴハリタケ科サンゴハリタケ属

【技術名称】 2－1－2 5－2 ヤマブシタケ (*Hericium erinaceum*)

【技術内容】

1 生理特性

菌糸体の伸長は、25℃付近で最大になる。また、菌糸体の伸長を最大にするオガコ培地の含水率は、60～62％であり、一般の栽培キノコよりやや低い。好適な子実体発生温度は、子実体の形状を整えるため 12℃程度が妥当である^{1) 2)}。

2 原木栽培

通常の本木栽培でも発生は可能であるが、収量は少ない。本木を袋に詰め、殺菌して菌を接種する殺菌本木方式では大型の子実体を発生させることが可能である³⁾。

3 菌床栽培

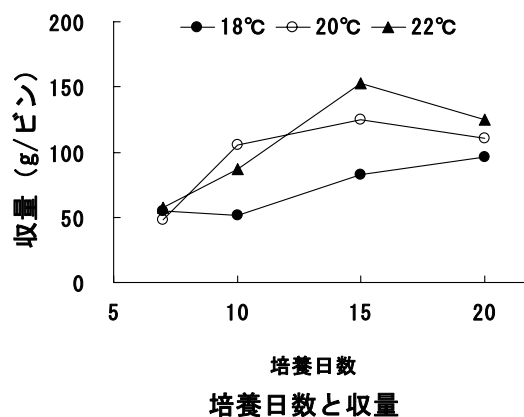
培養期間が短くてよく、基本的には空調施設を利用し、機械化した集約的な栽培体系に適する^{4) 5) 6)}。しかし、子実体の形状などの品質を多少犠牲にすれば、簡易な施設による粗放的な方式でも十分可能である。

培地基材としては、広葉樹オガコ、針葉樹オガコ、トウモロコシ芯の粉砕物など、幅広い資材が利用可能である。栄養材としては、トウモロコシヌカ、大豆種皮が有効であるが、フスマ、コメヌカも十分利用可能である^{1) 6)}。

培養中の温度は、18℃～22℃、発生温度は、子実体の形状を整えるためには 10℃～12℃が妥当である。培養中に菌糸がビン全体に蔓延する前から子実体の生長が始まるため、培養期間は 20 日間程度で十分である^{1) 6)}。

【図】

図 1 培養日数と収量（ビン栽培）



出典：「ニュータイプきのこ資源の利用と生産技術の開発」、長野県林業総合センター研究報告 第 19 号、増野和彦、小出博志、高木茂、松瀬収司著、2005 年 4 月、長野県林業総合センター発行、32 頁 図 5.1.1 ヤマブシタケ栽培における培養日数と収量

表1 殺菌原木栽培における子実体発生

系統	区分	15年度発生		16年度発生		供試数	接種日	埋設日
		個数	収量	個数	収量			
	Y1○	0.3	35.8	0.3	12.3	4	4.22.03	9.4.03
	Y5○	2.8	125.0	0.8	47.3	4	4.22.03	9.4.03
	Y5△	3.8	160.0	0.3	12.3	4	4.22.03	9.4.03
	Y5×	0.3	26.8	0.5	32.0	4	4.22.03	9.4.03

*殺菌用原木については、長さ20cmに玉切りした。

*玉切りした原木の直径により分割した。

15cm以上の場合は木口面から4分割(×)、12cm以上15cm未満は2分割(△)、
15cm未満は分割なし(○)とした。

出典：「里山を活用した特用林産物（きのこ）の生産技術の開発」、平成16年度長野県林業総合センター業務報告、2005年7月、増野和彦、高木茂、松瀬収司、長野県林業総合センター発行、61頁 表-2 ヤマブシタケ殺菌原木栽培結果（林業総合センター構内、発生：原木1本当たり平均値）

【出典／参考資料】

- 1) 「菌床栽培用きのこの育種と栽培技術の改良」、長野県林業総合センター研究報告 第12号、1998年3月、増野和彦、小出博志著、長野県林業総合センター発行、129-135頁
- 2) 「ヤマブシタケの栽培法の検討-子実体発生温度-」、日本林学会中部支部大会講演集41号、1993年1月、増野和彦著、日本林学会中部支部発行、169-170頁
- 3) 「ヤマブシタケの殺菌原木栽培」、長野県林業技術センター技術情報 117号、2004年7月、増野和彦著、長野県林業総合センター発行、4-5頁
- 4) 「ヤマブシタケの栽培法の検討（II）-培養期間について-」、45回日本木材学会大会講演集、1995年3月15日、増野和彦著、日本木材学会発行、614頁
- 5) 「ヤマブシタケ栽培法の検討（III）-培養期間の短縮-」、52回日本木材学会大会講演集、2002年3月10日、増野和彦著、日本木材学会発行、647頁
- 6) 「ニュータイプきのこ資源の利用と生産技術の開発」、長野県林業総合センター研究報告 第19号、2005年4月、増野和彦、小出博志、高木茂、松瀬収司著、長野県林業総合センター発行、31-35頁
- 7) 「里山を活用した特用林産物（きのこ）の生産技術の開発」、平成16年度長野県林業総合センター業務報告、2005年7月、増野和彦、高木茂、松瀬収司、長野県林業総合センター発行、60-61頁